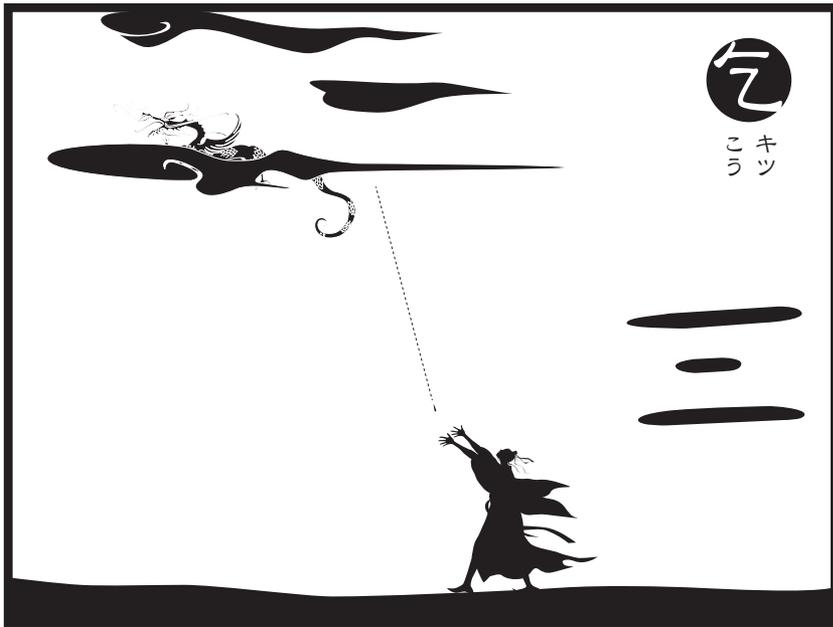


白川静のことば

《30》



金子都美絵・画

例えば雲でもね、今我々は水蒸気のかたまりが色んな形で動いておるといふくらいにしか思わんけれども、昔の人はあれを生きている、何らかの生物の形であると考えていた。「雲」という字のいちばん昔の形はこういう形、「気(キ)」「云(ウン)」という字、これに雨が付くと現在の「雲」になる。下の方のこのくるつと巻いた形、雲が流れとる形の、この雲の間からね、尻尾しっぽがぶら下がっておる。これは、龍。この龍の尻尾がね、巻いた姿で下半分だけ見えておる。これが雲。だから雲はね、生きておる一つの生物の姿である。こういう雲の流れを見て、色んな占いをする。ここに自然の霊の、大きな力を持ったものが、生命がある訳だね。

これに対して、この雲を眺めて、色んな占いをする。「気運を見る」という「気」という字がこれなんです。そういう気に対して、自分はこういう願い事があるんだが、という風にね、願い事をする。自然の霊というものはみなすぐれた力を持つておるからね、我々の祈りの対象になる。それを祈ることを「乞こう」という。「乞」という字は、「気」という字の一本だけ外した形。この「気」をのぞむ「吉凶をみるといふようなことはね、陰陽五行の占いの中にある訳ですが、そういう気を通じて自分の願い事を神に聞き届けてもらう、乞こい願うという、この「乞」という字がやはり雲気の流れを描いて、乞こうという字になる。

(岡野玲子さんとの対談より抜粋)
『桂東雑記一』平凡社 P304～305

